

記念講演 演題 「景観づくりから景観まちづくりへ」

講師 久 隆 浩



景観づくりから景観まちづくりへ

近畿大学総合社会学部教授
久 隆 浩

プロフィール

ひさ たかひろ
久 隆浩 近畿大学総合社会学部教授



1958年高知県生まれ、大阪育ち。1986年大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了。工学博士。財団法人21世紀ひようご創造協会主任研究員、大阪大学工学部助手、近畿大学理工学部助教授、同教授などを経て、2010年より現職。景観まちづくりだけでなく、近年はさまざまな分野のまちづくり活動・市民活動の支援を行っている。豊中市都市計画審議会委員、東大阪市環境審議会委員、大阪市社会教育委員など行政委員も多数担当している。主な著書に「景観からのまちづくり」、「はじめての環境デザイン学」、「都市・まちづくり学入門」、「都市構造と都市政策」、「21世紀の都市像」などがある。

皆様、こんにちは。

それでは、1時間強になると思いますが、私からお話をさせていただきます。

本日のお題は「景観づくりから景観まちづくりへ」としてありますが、先ほどの都市景観賞の表彰式にもありましたように、最近は景観づくりというよりも景観まちづくりというところが多くなってきています。さらには、まちづくりをした結果として景観ができるのではないかということをお話をさせていただければと思っています。

少し自己紹介も兼ねてお話をさせていただきますと、私が景観の仕事をして、かれこれ30年ぐらいになります。30年前、景観の仕事というのがどういう状況だったのかを振り返りますと、まだまだ世の中で景観に配慮するとか景観を考えるという時代ではありませんでした。また後ほど本の話もしますが、学芸出版社から「景観からのまちづくり」という本を出しました。学芸出版社は、今はまちづくりで非常に有名な出版社になりましたが、30年前、この「景観からのまちづくり」という本を出すときに、今は社長になりました編集部の前田さんという方に、「ちゃんと売れる本にしてくださいね」と言われました。つまり、30年前は景観の本ではなかなか本屋に

並べても売れない時代でした。しかし、今は景観を考えるのは当たり前になってきています。

先ほど私のプロフィールをご紹介いただいたときに、21世紀ひようご創造協会に勤めていたというお話がありました。21世紀ひようご創造協会は兵庫県の外郭団体で、今は震災の機構になっています。兵庫県の外郭団体に勤めていました関係上、兵庫県内でも幾つもの仕事をしてきました。この姫路市は、実は都市景観の分野ではかなり先行的に頑張っている都市だと認識しています。

景観条例

- 景観条例
- 1978 神戸市都市景観条例

- 景観まちづくり条例
- 1991 新宿区景観まちづくり条例

- 景観はまちづくりの結果

さて、ここから本題に入りたいと思います。先ほど景観づくりというより、最近は景観まちづくりと話すことが多くなってきたと言いましたが、例えば条例の名前を見ていくと、そのことがわかると思います。

姫路市は都市景観条例だと思いますが、日本で初めての都市景観条例をつくったのは、同じ兵庫県内の神戸市です。神戸市が1978年に神戸市都市景観条例をつくり、これが全国に先駆けての都市景観条例です。この当時は、名前のおり都市景観条例であったり、景観条例であったりと、景観という名前がついていたわけです。

ところが、最近は景観条例というよりも景観まちづくり条例という名前が変わってきています。この景観まちづくり条例という名前を使った先駆けは新宿区だと思いますが、新宿区が1991年に景観まちづくり条例と名前をつけて条例化をしました。これが1つの典型

例でありまして、景観は、上辺のデザインではなくて、まちづくりをやった結果として景観ができてくるのではないかと。本日、皆さまにお伝えしたいのは、まちづくりをしっかりやれば、その延長上にしっかりした景観ができる。逆に、その上辺の化粧だけで景観を整えようとしてもなかなか難しいのではないかとというお話を、本日は皆さまにしたいと思います。

少しまた自己紹介に戻りますが、私の今の仕事は、景観の仕事もやっていますが、3分の2はまちづくりそのものの仕事をやっています。地域に入り、地域の方と一緒にまちづくりをやっています。私の仕事の内容そのものも、まちづくりという観点が多くなってきました。

棚田は景観への配慮から生まれたか？

- 地形(等高線)を読み取り、巧みに造成
- 人手による造作(工事)



さて、それはどういうことなのか、もう少し解説を加えたいと思います。突然棚田の話が出てきますが、棚田は非常に美しい景観です。姫路も北部に行きますと、山合いの地域もあります。こういう山合いの地域で棚田をつくってきました。

これは千葉の大山千枚田の風景ですが、こういう山合いの集落には必ずこういう棚田の風景が広がっています。なぜこの棚田の風景のお話をしているかというと、確かにこの棚田の風景は美しいですが、この棚田は私たちの先人が景観を良くしよう、景観へ配慮しようとしてつくったものでしょうか。

実は、景観へ配慮するとか美しい景観をつくるために棚田をつくったわけではありません。

これは合理的に棚田をつくった結果、美しい景観ができ上がっているわけです。その合理的とはどういうことかといいますと、昔は工事をするとき機械が使いませんでした。ですから、人手で工事をするために、いかに効率的に工事をするかを考えたわけです。そうしますと、いわゆる造成工事を最も少なく済ませる、切り土とか盛り土をしないで工事をしようと思ったときに、最も効率的なのは、地形を読み取って等高線沿いに田んぼをつくるのが一番効率的となったわけです。ですから、この田んぼの形というのは、見事に等高線に沿ってでき上がっています。

さらに、この擁壁の高さですが、人間がその擁壁をつくっていくわけですから、人間の背丈を超えるような大きな擁壁はつくることがありません。ですので、非常に人間の尺度に合った、いわゆるヒューマンスケールな擁壁ができるわけですから、最も効率的に、合理的に工事をした結果、美しい景観ができ上がっている、こういうことだと思います。ここを改めて考えてみたいと思います。

つまり、昔の方々は、普通に当たり前で生活することで美しい景観をつくってきたわけです。しかしながら、私たちはそうはいかない。なぜだろうかということを考えていくのがこれからの話です。

昔は、そういうことをやっていくことに必然性とか意味があったわけですが、それがだんだん薄れてきてしまって、その結果、秩序や景観が乱れてきているのではないかと。別の言い方をしますと、何でも自由にできる時代が来たからこそ、注意して秩序をつくる努力をしないと、景観が乱されるのではないかと。思います。

生活の必然から生まれる秩序

- 必然性や意味の喪失
→ 秩序や景観を乱す
- 何でも自由にできる時代
→ 秩序をつくる努力が必要に



また後ほどお話をしますが、こちらは奈良県の橿原市にあります今井町という寺内町の風景です。今井町はとても有名な寺内町で、今やっているNHKの朝ドラ「あさが来た」という番組のロケ地の1つです。江戸末期から明治の初めのドラマですが、それを撮影しようと思ったときに、この今井町が選ばれました。今井町は江戸末期から明治初期のまちなみ、500軒ほどの町家そのまま残されている地域です。なぜこの今井町の話を持ち出しているかといいますと、この時代は、使う材料、使う意匠や、デザイン、その選択肢が非常に狭かったわけです。ですから、自ずとまちなみが整ってきたわけです。

今はいろんなデザイン、いろんな色彩、いろんな素材が使えます。ですから、一人一人が自分の趣味、好みで建物を建てていくと、それが並んだときに統一感のない景観になってきます。これが良いとか悪いとかの話ではなく、昔は選びようがなかったのです。さらに、先ほどの棚田と同じように、当たり前で合理的に生活することが景観づくりに役立っていましたが、今は注意しないと景観が乱されてしまう、こういう世の中に私たちは生きていることを改めて確認する必要があると思います。

美しい国づくり政策大綱

美しい国づくりのための取り組みの基本的考え方

(2) 地域ごとの状況に応じた取り組みの考え方
美しさに関するコンセンサスの状況に応じた施策展開

- ・ 悪い景観(景観阻害要因)とだれもが認めるものへの対応
- ・ 優れた景観とだれもが認めるものへの対応
- ・ 普通の地域(コンセンサスがないうち)での対応
→ 生活景

さて、話を変えまして、現在では、景観に関する法律に景観法がありますが、景観法をつくる1年前に国土交通省が美しい国づくり政策大綱を出しました。景観法をつくり、日本の景観を良くしようという姿勢を示したのですが、それに先駆けて国はどのような姿勢で景観づくり、美しい国づくりをやっていくのかをまとめたものです。

その大綱の中に、美しい国づくりのための取り組みの基本的な考え方という項目があります。その2番目に、地域ごとの状況に応じた取り組みの考え方という項がありまして、ここに美しさに関するコンセンサスの状況に応じた施策展開ということが書かれています。この美しさに関するコンセンサス、なかなか難しい言い方ですが、どれだけの人が美しいと思うのかという、その合意がどれだけとれているかということですが、その合意のとり方で3つのタイプの景観があると整理をしています。

1つ目ですが、悪い景観、景観阻害要因と誰かが認めるものへの対応です。つまり、誰が見てもこれは景観を乱している、これはどう見ても景観が悪いと、多くの人たちが思うような景観がある。これはどう対応したらいいかすぐにわかります。そういうものを排除する、あるいは美しく変えていくことをしないといけないということです。

2つ目、今度は逆にすぐれた景観と誰かが認めるものへの対応です。誰が見ても美しい景観がある。例えば、日本の象徴である富士

山の風景は誰が見ても美しいと思う。こういう誰が見ても美しい景観は守っていかないといけないことになります。

本日、表彰式で野里街道の皆さまの取り組みが表彰されましたが、その野里街道沿いの町家が並んだまちなみもすぐれた景観と思っているから守っていかうということになります。

このようなすぐれた景観と誰かが認めるものへの対応というのは、守っていくことをしないといけないということです。姫路市の場合、誰が見てもすぐれた景観と認める典型的なものは姫路城だと思いますので、こういうものが随所にあるのが姫路市の特徴かもしれません。

この誰かが認めるものというのが2つありましたが、普通の地域での対応というのが最後の3つ目です。普通の地域とはどういうことかということ、コンセンサスがないうち、つまり美しいのか美しくないのかもよくわからない町というのがあるわけです。こういうものをどうするのかを考えていくのが3番目の話です。日本建築学会では、この普通の地域の景観を生活景と最近呼んでいます。生活景というのは、私たちが普通に生活しているところの景観という意味です。

なぜその話をさせていただいているかというと、このすぐれた景観と誰かが認めるものへの対応は、全国的にもかなり進んできました。また後ほど幾つかご紹介しますが、伝統的建造物群保存地区という制度があります。いわゆる歴史的まちなみを守ろうという動きはどんどん広がっていきまして、ついに全国で100のオーダーに届きました。このような取り組みはこれからも続いていくでしょう。

しかしながら、実は日本の国土を美しくするためには、私たちが普通に暮らしているこの普通の地域、生活景を美しくする必要がありますのではないか、こういうことを、今、日本建築学会でも私も含めて非常に注目し、頑張

ろうとしています。

将来像についてのコンセンサス形成

普通の住宅地や商店街、地方都市の駅前、郊外バイパスの沿道、身近な水辺など国民が日常的に接する普通の地域の大部分では、歴史性、風土性、文化性など地域の個性を規定するものがはっきりせず、どのような地域としていくかという点について住民のコンセンサスが形成されにくいというのが現状である。このような地域では、コンセンサスを形成するプロセスを経る住民主体の地道な取り組みが重要である。例えば、比較的目標として分かりやすい水や緑を有効に活用した地域づくりを一つのきっかけとするなども考えられる

では、この普通の地域というのはどういう地域なのか、これをどうすればいいのかというのがこれからの話です。この美しい国づくり政策大綱にはこのような説明文がありました。少し長いですが、一緒に読んでみます。

「普通の住宅地や商店街、地方都市の駅前、郊外バイパスの沿道、身近な水辺など国民が日常的に接する普通の地域の大部分では、歴史性、風土性、文化性など地域の個性を規定するものがはっきりせず、どのような地域としていくかという点について住民のコンセンサスが形成されにくいというのが現状である。このような地域では、コンセンサスを形成するプロセスを経る住民主体の地道な取り組みが重要である。例えば、比較的目標として分かりやすい水や緑を有効に活用した地域づくりを一つのきっかけとするなども考えられる。」という文章です。

この文章は3段構えになっていると思いますが、まず私たちがふだん接している、ふだん暮らしている町は、町の個性がよくわからないということです。そして、だから将来どのような地域にしていくかということに対して、そこにお住まいの方々のコンセンサス、合意もなかなかとれていないということです。

将来像についてのコンセンサス形成

- 地域の個性：歴史性、風土性、文化性など
- どのような地域としていくかという点についての住民コンセンサス形成
- 景観まちづくり／まちづくり

では、こういうところでは何をしていたらいいのかということ、コンセンサスをつくっていく、将来、私の町はこのようにしたいということをもみんなで話し合い、合意をとっていくという過程が必要で、これを住民主体の地道な取り組みでやっていくことが重要です。これが、まさしくまちづくりです。5年後、10年後、20年後、30年後の私たちのまちをどのようなまちにしていくのかを議論し、そこで合意が図れて初めて景観づくりも始まるということです。その取り組みが今後ますます全国で必要だと思っています。

でも、それは非常に難しいです。難しいので、最後のパラグラフです、「例えば、比較的目標として分かりやすい水や緑を有効に活用した地域づくり」と書いてあります。緑は要らないという人はあまりいないと思います。やはり緑は多いほうがいい、花はあったほうがいい、清らかな水は流れていたほうがいいという声が多いと思いますので、このように揉めないものから始めたらいいいと思います。

市長の話にもありましたが、建物のデザインや色はかなり、好み、趣味があります。しかし、緑をふやしていきましょとか花で飾りましょということに関しては合意がとりやすいと思います。ですから、そういう緑を増やしていきましょとか花を植えていきましょという取り組みから始めたらいかがでしょうか。こういうことを国も言っています。ここが私にとってこの20年ほど地域の方と一緒に頑張ってきたところですよ。

さて、もう一度話を戻します。3つの段階があるという話をしました。この真ん中のすぐれた景観と誰もが認めるものという話をしましたが、実はこれを改めて考えてみると、あることがわかります。

優れた景観とだれもが認めるもの

- ・ 奈良県橿原市今井町(1993)
- ・ 伝統的建造物群保存地区(1975)



先ほどご紹介した奈良県橿原市の今井町ですが、今はみんなでこのまちなみを守ろう、町家を守ろうという動きになっていますが、この今井町は日本で最大級の寺内町です。伝統的建造物群保存地区制度を1975年に文化庁が文化財保護法の改正に伴ってつくりましたが、これは、今井町を守ることを目標につくられた制度です。ですから、文化庁はこの今井町のまちなみを守ろうということで伝統的建造物群保存地区制度をつくりました。

ところが、今井町が伝統的建造物群保存地区になったのは、なんと20年あたり先、1993年です。では、この20年弱で何をしてきたのかということが重要になります。

これは野里地区でも議論になったかもしれませんが、この町家にお住まいの方にとって、町家に暮らすのは相当不便なこともありますし、早く近代的な建物に建てかえて近代的な生活をしたいという思いもあるわけです。今井町もそうでした。専門家とか文化庁が立派なまちなみだから守ってくださいと言います。しかし、住んでいる人たちは何を言っているのだという話になります。新しい家に住んで、新しいマンションに住んで近代的な生活を送っている人が何を言っているのだという話になります。そこで、時間をかけて市と住民、

そして住民同士が話し合っ、十数年かけてようやくこのまちなみを守っていくという結論に達しました。

ここが皆さまにも本日お伝えしたい1つの柱の話かと思っています。すぐれた景観とは、最初から誰もが認めているわけではありません。話し合った結果、誰もが認めるもの変わっていくと考えた方がいいと思います。ですから、先ほど普通のまちという話をしましたが、普通のまちも徹底的に議論をしていけば、この誰もが認めるまちに変わっていく可能性があるということです。歴史的なまちなみでさえ時間をかけてみんなで議論し、特にそこにお住まいの方が納得するまで議論をしていくことが重要です。

私も今井町のお手伝いをしました。また、幾つかのこの歴史的なまちなみの保全もお手伝いしてきましたが、最初は、先ほどの今井町のように、私たちが行くと怒られます。何を勝手なことを言っているのだという話になります。そこは時間をかけて膝をつき合わせて話し合った結果、最終的に歴史的な町を守ろうと言ってくれました。

この今井町の方々はなかなかすごいことを言われたのですが、何を言ったかということ、歴史を守ることを選択したわけではないということです。どういうことかということ、これから何十年後かの今井町のまちづくりを考えたときに、全てを新しい建物に変えると、普通のまちになってしまう。これだけ400年間守り続けてきた個性を、特徴をそう簡単に捨ててはいけないという判断をしたわけです。全国に特徴出しをする。そのためには、私たちは先祖からいいものを受け継いでいる。これをみすみす捨ててしまう、なくしてしまうのは、未来のまちづくりにとって大きなマイナスではないかという判断をしました。だから今井町の方々、これからのまちづくりを考えたときに、このまちなみを守り、後世に届けていくことが未来のまちづくりとして必要だと思いついたわけです。ここまで来れば、

本物になっていくと思います。

そしてもう一つ、私は感動的な言葉を聞きました。この町家を守るということは、その中での木造住宅の暮らしを守らなければいけない。その暮らしを受け継いでいくことも私たちの義務だと言っていました。その結果、今も非常に美しいまちなみが残っていますし、さらに言うと、全国でもすばらしいまちなみだからこそ、朝ドラのロケ地になるわけです。こういうことを地道にやってきました。

ただ、先ほど言いましたように500軒です。500軒の方々の同意をとるのは相当大変でした。リーダーと言われる方々が足を運び、いろんな方々と話を続けていった成果として、この歴史的なまちなみが残りました。

歴史的まちなみ・残る／残す

- ・ 近世に栄華を誇る
- ・ 近代化に取り残される

- ・ 残る→残す

- ・ 酒造業
- ・ 味噌・醤油醸造
- ・ 地域経済の循環



さて、そのあたりをさらに突っ込んで考えていきたいなと思います。話が少し違う方向に行きますが、今、まちなみの話、歴史的なまちなみを言ってきましたが、この歴史的なまちなみを残すというのと歴史的なまちなみが残るというのはかなりニュアンスが違うと思っています。これからは残るといふことと残すといふことを手がかりに考えてみたいと思います。

歴史的なまちなみが残っている地域の方には申しわけないのですが、全国、先ほど言いましたように、伝統的建造物群保存地区が100カ所以上あります。この100カ所には共通した特徴があると私は思っています。それは何かというと、近世、つまり江戸時代までにはその地域の中心部で非常に栄華を誇ってきた地

区であるということです。そこで経済が富み、そして大きな町家をつくってきた、立派なまちなみをつくってきたわけです。ですから、近世は地域の中心として経済的な栄華を誇り、その結果、立派な町家が立ち並ぶ立派なまちなみが形成されてきました。ところが、明治以降、近代化になったときに、実は取り残されてしまったということです。

なぜかといいますと、近代化が進めば建物も自ずと変わってきます。ですから、百数十年のうちに建物が近代化していきます。そういうところには町家は残りにくいです。しかし、その近代化に取り残されたことが、実は今考えるとよかったということになっている地域が多いのではないかと、私は推測しています。残ったということです。

しかし、その残ったものをこれからも残していくという意味に変えていくことが重要ではないかと思っています。この今井町もそうでした。今井町は海の堺、陸の今井と言われるほど、江戸時代までは富が集まった地域でした。しかしながら、近代化の波に乗り切れずに500軒の町家が残りました。しかし、それを今度は新しい形で残そうという意味に変えたところが重要で、それに20年かかったということです。

さて、この経済という観点でまちなみを見ますと、もう一つ違ったことが見えてきます。それは何かといいますと、歴史的なまちなみが残っている地域に行きますと、一番立派なお宅はほぼ間違いなく酒屋さんです。造り酒屋さんです。造り酒屋さんが大きな屋敷を構え、そしてそこで酒づくりもやってこられました。それが残っているから、そのまちなみの核になっているわけです。続いて、味噌・醤油の醸造をされていたお宅です。こういう酒造業の方、味噌・醤油の醸造の方、こういう方々が何軒かその地域の中であって、そのまちなみの核をつくってきました。

では、この酒とか味噌とか醤油というのは誰のためにつくっていたのかを考えると、あ

ることが見えてきます。これは全国に売るといよりも、地域の方々が消費したということだと思います。この近所で言うと、龍野のように全国に醤油を販売していた地域もありますが、それは限られていまして、ほとんどの地域は、その地域の人たちが消費する酒、味噌、醤油をつくってきました。

なぜその話を強調しているのかというと、この立派なまちなみは地域でお金が回っているからこそ成り立っていたのかもしれないということです。今は、いわゆるグローバル経済になりました。どんどん東京へお金が集まる。さらには、海外にお金が出ていくという世の中になり、地域循環の輪が切れてしまっています。そうすると、この町家、まちなみも大きな打撃が出てくることとなります。

そういう意味では、先ほどの話からの繰り返しですが、私たちの暮らしが地域をつくり、まちなみをつくってきたのです。それをもう一度その根底から考え直さない限り、こういう歴史的なまちなみを残せ、残せという言葉だけでは済まないということかと思えます。そのあたりは実際にそこにお住まいの方がどういう生業をされているのか、どういった生活をされているのかも含めて、膝をつき合わせて話し合っ方向性を見出さない限り、まちなみの保全はないだろうと思っています。これもまさしくまちづくりです。まちづくりとしてどうするのかをトータルに考えていく必要があると思っています。



さて、その延長上の話ですが、私たちの暮

らしがどのように景観を成り立たせてきたのか、そしてそれから私たちは何を学ばないといけないのかをさらに考えてみたいと思います。

その手がかりとして、民家というのを考えてみたいと思います。民家というのは、昔ながらの地域の伝統的な住宅のことです。ここには2つの典型的な民家を持ってまいりました。

左は、有名な世界遺産にもなっています、岐阜から富山にかけての合掌づくりの建物です。この合掌づくりの建物、これは先ほど言いましたように、岐阜の北部から富山の南部の谷筋の集落の住宅の形です。こういうものが今も残されていて、世界遺産にも登録されるようになりました。

ちなみに、なぜこの形になったのかということにも意味があります。この地域は、もうおわかりのように雪深い地域です。雪深い地域ですので、屋根に雪が積もらないように、この急勾配の屋根になっています。

さらに、行かれた方はおわかりと思いますが、非常に大きなお屋敷になっています。建物が非常に大きい。部屋もたくさんあります。これはこの地域が大家族制度という地域社会のルールがあったからです。どういうことかということ、普通、農家は長男世帯が継いでいきます。ところが、この地域というのは、この家の中に長男世帯も次男世帯も三男世帯も住みます。ですから、非常に大所帯、大家族です。そのために大きな住宅になっていきます。

さらに、雪深い地域でお金を稼ぐために、養蚕、蚕を飼っています。この3階部分が蚕部屋になっているわけですが、大家族で、さらに蚕も家の中に飼うということで、非常に大きな家になっているという、その気候条件と家族形態、それから生業の形態がこのような形をつくってきました。

右側、島根県の^{ひかわ}簸川平野の住まいの形です。

こちらは、住宅が見えていませんが、ここに築地松^{ついでまつ}という防風林があり、向こうにも防風林が見えています。こういう松を長方形に刈り込んだ防風林が作り出す景観がこの島根県の簸川平野の特徴です。ご承知のように、日本海側は冬の季節風が非常に強い。それを防ぐためにこういう防風林をつくっています。

このように、それぞれの地域で気候が違う、生業が違う、家族形態が違う、こういうことを反映して、それぞれの住宅に特徴的な形があり、これを民家と呼んでいます。



これも違うところの民家ですが、この左側上の写真は大阪の一番北側の能勢町にある民家の風景です。

左側下の写真は、京都府南丹市美山町の、伝統的建造物群保存地区になっています「北」という集落の農家です。

方向が違うので、ぱっと見はわかりませんが、この能勢町の農家の形と美山町の農家の形は一緒なのです。ここからずっと北側へいった敦賀のあたりも同じ形になっています。今は福井県、京都府、大阪府という3つの府県にまたがっていますが、同じ谷筋の南北で同じような形の民家が見られるわけです。ですから、今の府県境とは違う文化圏を持っていたことが、こういう民家の形を見ていくとわかります。

右側上の写真、これは奈良県の特徴的な民家です。奈良の大和ですが、大和棟という形です。この主屋の大屋根のところに小さな附

属屋の屋根がついています。ここは台所で使われていることが多いのですが、この大屋根に小さな屋根がくっついている2棟続きの形、これが大和棟という形です。これが奈良県の特徴的な民家の形です。

右側下の写真ですが、これは近鉄の畷傍^{うねび}

御陵前駅^{ごりょうまええき}という駅舎のデザインです。見てお

わかりのように、この大和棟の形を模した駅舎の形になっています。こういうデザインの特徴を持った駅舎があるということをご紹介します。



このように私たちの祖先、先人は、当たり前のように地域性を持った景観をつくってきました。では、私たちはどうだろうかということを考えてみたいと思います。

今2枚の写真をご提示しました。左側は福岡県飯塚市の幹線道路沿いの風景です。右側は茨城県ひたちなか市の幹線道路沿いの風景です。これに、もし姫路の幹線道路沿いの風景を並べてもほとんど変わりません。ここはあえて同じ店舗を載せておいたのですが、なぜこういう風景になるのか。別にこの店舗を責めているわけではないのですが、結局、幹線道路沿いは全国チェーン店が並んでいきます。そうなってくると、同じような景観になっていくわけです。これは私たちの消費生活がそうさせているのかもしれませんが。この幹線道路沿いで地域性のある景観は、残念ながら、私は見たことがありません。ほとんど同

じような風景の幹線道路の沿道の風景になっています。それは、先ほど言いましたように、沿道に並ぶ店舗がほとんど全国チェーン店であるということからです。

ショッピングモールの店舗構成もよく似ています。ほとんど全国展開する店ばかりです。皆さまには直接関係ないですが、私は大阪府茨木市に住んでいまして、私の近所に日本最大級のショッピングモールができました。しかし、中に入っている店はほとんど全国チェーン店です。でも、人が集まります。楽しく買い物ができます。そういうものがショッピングモールになり、こういう沿道の店舗構成にもなっていると考えます。



こういう商業施設だけではありません。これは、ニュータウンの風景です。ニュータウンの風景も特徴あるものはなかなか少ないです。ほとんどどこへ行っても、シャッフルしたらどこかわからないような風景になるわけです。〇〇ハウスとか〇〇住宅とかという、いわゆるプレハブメーカーの画一的なデザインで建物が建てられていくことになるわけです。これは確かに便利で住みやすいかもしれませんが、その地域性ある景観という意味においてはどうなのかなということを考えていただくために、このように極端な話をしています。

私は今でも景観の仕事をしていますが、景観計画をつくったときに、ここの地域らしさがないとよく言われます。こんな景観計画はどこへ行っても一緒ではないか。姫路はどう

なのか、もう一度見ていただきたいと思いますが、姫路を加古川にかえても一緒じゃないかと言われます。でも私はそれを市民の方にお返しをしたいと思います。では、その暮らしの中で姫路らしい暮らしをしていますか。同じようなテレビ番組を見て、同じようなレストランでご飯を食べ、同じようなコンビニで買い物をしている。その延長上にまちがあり、景観があるとしたときに、暮らしに「らしさ」がなくなっているのに、その上辺のデザインだけに「らしさ」を取り戻すというのはどうなのか考えてもらえればと思います。

ですから、非常に極端な話をすると、暮らしそのもの、生活そのものから地域にこだわっていただきたい。その地域にこだわる方々がどんどん増えてくれば、自ずとその地域らしい、姫路らしいまち、姫路らしい景観ができ上がっていくのではないかと思います。

これは姫路の方には失礼な言い方になるかもしれませんが、姫路の駅前はきれいになりました。でも、姫路城が見えないと、どこの駅前も同じような駅前になったのではないかと思います。デパートの特徴的な看板はありますが、それを除き、姫路城も除いてしまうと、どこでもあるような風景の駅前になったのではないかと思います。

これは姫路に限ったことではありません。全国の駅前を再開発すると、よく似た駅前になってしまいます。そうすると、今度は逆に姫路に住む、姫路に来る必然性がなくなってきて、地域の元気がなくなっていくことにもつながるのではないかと思います。本日は、そういうことを考えていただく契機になればと思います。

みんなでいい景観をつくる

- 生活に必然性を埋め込む
- 燃料源としての里山活用
→ 社会貢献・楽しみとしての里山管理
- 町家に暮らす試み
- 産業振興・観光振興と景観づくり

- お互いさまの気持ち・周囲への配慮があれば、
ルールは不要

では、こういう後ろ向きの話ばかりしていても仕方ありませんので、どうしたらいいのかを考えていきたいと思います。先ほどから言っていますように、私たちの生活、暮らしをもう一回見直さないといけない。それがここでなければならぬとか、こうでなければならぬという、難しい言い方ですが、必然性を埋め込む必要があると思います。

今までは建物景観の話が多かったので、ちょっとその話を変えます。姫路の北部でも里山景観が残っていますが、この里山も今までは生活のために守られてきました。そこから薪、燃料を取り、その落ち葉をかき集め肥料にするという形で、生活の糧として里山管理がなされてきました。

しかしながら、今は石油を、天然ガスを使い、化学肥料を使うようになり、里山に入る必然性がなくなってきました。そうすると、昔の生活に戻すのはなかなか難しいので、今度は別の形で生活の一環として里山管理、里山活用をやる方法を考えないといけない。

その1つは、社会貢献、わかりやすく言うとボランティアです。あるいは、自分が空いた時間、余暇時間としてこの里山を管理すること、里山を手入れすることが自分の楽しみになる人にしていただく形で、生活の一部として里山の手入れをしていただくという仕掛けをどんどん増やしていく必要があると思います。

さらに、町家に暮らすという試みをどんどん増やしていくことで町家が守られることに

なるわけです。最近では若い人たちが町家に暮らしたいという意向が出てきていまして、そこをうまく活用できるかどうか、これはまた後ほど具体的な事例をお示ししますが、そういう生活の一部として町家を守るという動きにしていく必要があると思います。

逆の話をするすると、大体、空き家ができて市が買い取ります。多くは資料館にしますというパターンです。資料館は10個も必要ありません。ですから、やはり一つ一つの活用をうまく考えていく必要があると思います。

それから、お金が回ればもっといいということで、産業振興とか観光振興など、お金になることで景観づくりができれば、もっともとうまく回っていくだろうと思います。そういう観点で考えていくといいなと思います。

さらに、ちょっと違う面では、法律で縛らなくても、お互いさまの気持ちとか、周りに対してこういうことをやってもいいな、いけないなということを考えていけば、ルールがなくても、その隣の家に合わせ、周りの景観に合わせたデザインができ上がるわけですから、これが理想ではないかなと私は思っています。

このような「わざわざ感」で景観をつくっていくのではなく、私たちの営みの延長上に、暮らしの延長上に景観づくりがあるような、こんな仕掛け、仕組みを考えていければなと思います。

秩序をみんなで生み出す

- 秩序を生み出す方法

- 規制
- 誘導
- 啓発

3つのシステム

| システム | 国家・行政システム | 経済システム | 協力システム |
|---------|--------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| 概要 | 監視と処罰を通じて利己的な人間行動を抑え制御する | 市場を通じて利己性が共通の善に貢献するような行動をもたらす | コミュニケーションを通じて相互に理解し合い支え合う |
| 行動媒体 | 権力 | 貨幣 | 個々人の自発性 |
| 行動規範 | 公共性 | 功利性 | 共感・関与 |
| 動機付け | ムチ(罰) | アメ(報酬) | 自発性 |
| 想定する人間像 | 信用できない人 | 利己的な人 | 信頼できる人 |

景観まちづくり

- 自分のまちを改めて考えてみる
- 暮らしがまちや景観をつくる
 - ← どのような暮らしをするのか
- 大切にしたい資源・まちの将来像を共有する

ここから少し具体的な事例も含めてお話をしたいと思います。先ほどから言いましたように、景観ではなく、景観まちづくりだという話を改めてここから考えて、具体的な事例を載せていきたいと思います。もう一度自分のまちを改めて考えてみて、まちだけではなく、自分の暮らしがどのように町家景観をつくっていくのかを見つめ直していただきたい。そのためにはどんな暮らしをこれからしていったらいいのかを考えていくことが重要です。そして、こういうことを一人一人が考えたときに、地域の中で話し合っていて、大切にしたい資源や、町の将来像を共有できこそ、景観まちづくりが実現すると思っています。このあたりをきちんと時間をかけてやりますと、一旦合意がとれれば、あとはずっと進むと思います。逆にこのあたりの根底をしっかりと組み立てていかないと、後でどこかでガタが来ることになりまますので、その見た目の景観とか見た目のデザインを考える前に、こういう根底のことをしっかりと時間を

かけて議論をしていければと思います。

無理せずできることから



今ここに見せました2つの写真ですが、この上に「無理せずできることから」とタイトルをつけておきました。これは2枚とも大阪の富田林の寺内町の一角の写真です。富田林も寺内町ということで、400年以上続く伝統的なまちなみが残ってしまっていて、国の伝統的建造物群保存地区になっています。

この2枚は、実は町家ではありません。新しい建物です。この下側の写真、これはつい最近つくられた建て売り住宅です。建売住宅もこのようにちょっと町家風のしつらえでつくられるようになってきました。これは即時完売です。若い方がお買い求めになりました。そのお買い求めになった方と話をしますと、こういう家が欲しかったと言っていました。普通の戸建て住宅でなく、町家風のデザインの、町家風のしつらえのあるこういう戸建て住宅が欲しいという方がおられるわけです。このような試みが、今、富田林では行われてきています。決して古い建物だけではなく、新しい建物が古い建物を意識しながらつくられるようになりました。

上側の写真は何かわかりますでしょうか。ちょっと時間をさし上げますので、私は何を言うためにこれを持ってきたのか考えてみてください。

これ、実は見ていただきたいのはここです。この建物、この塀を取り除きますと、この建物の外観があらわに出てきます。この所有者さんには申しわけないですけど、昭和40年に

建てられた普通の木造住宅です。これを何とかしたいと思い、市が所有者さんに交渉しました。建て替えをするのは難しいので、工事費を助成しますから、1枚塀をつくってもらえませんかというお願いをしました。そうすると、ここを歩いていると、この建物が見えなくなり、この塀がまちなみに調和したのに見えてきます。塀を1枚建てるだけで周りの建物への配慮、まちなみへの配慮をいただいたという事例です。こんなことも考えられればと思います。

金沢の有名な観光地、ひがし茶屋街ですが、我々専門家がひがし茶屋街を歩いていると、実は半分ぐらいの建物は単に板を張っているだけだと感じます。この前発見したのは、普通のアパートを塀で囲って後ろを見えなくしていました。そういうちょっとした工夫で皆さまが、一人一人が納得できる形で交渉しながらどこまでできるかという話でやっているのが富田林の寺内町の修景、景観を整えるということです。

資源の活用／カフェ茨木湯



これは歴史的なまちなみではないのですが、少し変わった古い建物の利用をご紹介しますと思います。

これは私が住んでいます大阪府茨木市ですが、ここに「c a f e 茨木湯」というものがあります。名前のおり「茨木湯」、つまりもともとは銭湯です。ここに銭湯の煙突があります。ご多分に漏れず、銭湯が儲からないということで店をたたみました。そこに若いカフェのオーナーさんが銭湯を貸して欲しい

という話になりました。

カフェ茨木湯



おもしろいのは、この銭湯のままカフェに改装しました。どうなっているか。これは洗い桶ですが、ここにテーブルを置きまして、ここでお酒が飲める、ご飯が食べられるという、こういうおもしろい改修をしました。レンタルの期間が切れて、残念ながら今はなくなってしまいましたが、このように若い人にはすごくおもしろいアイデアがあります。銭湯をそのまま使ったほうがおもしろいじゃないかという、そういうノリで所有者さんに協力をしていただいて、こんなユニークなカフェに改装したということです。

ここは洗い場そのままです。ここで普通は頭を洗うのですが、ここに椅子を置いて、このシャンプーとかを置く場所が、テーブルのかわりになるということを考えていました。この写真は洗い場、風呂場の風景ですが、手前の脱衣所もテーブルを置いて、そこも使っていた、そういう風景です。

寺西家阿倍野長屋



さて、続きまして大阪市の阿倍野区にあり

ます寺西家阿倍野長屋です。これは地下鉄御堂筋線の昭和町という駅がありますが、その昭和町の駅を上がってすぐの1つ裏路地に入ったところにある建物です。

ご承知の方がおられるかもしれませんが、昭和町というのは、地下鉄御堂筋線の天王寺の次の駅です。ですから、都市のど真ん中の地域ですが、戦災を逃れたこともありまして、こういう長屋がたくさん残っている地域です。昭和町という名前のように、昭和の初めの区画整理事業でできた町ですので、古くても昭和の元年ですから築80年ぐらいの建物ですが、その中にたくさんの長屋、町家があります。

これは名前のとおり寺西さんという方がお持ちの長屋です。寺西さんは、ここにお住まいになっているのですが、見てのとおり4軒長屋です。この下屋、下の屋根を見ていただくと、この4軒長屋が、今、4軒のレストランとして活用されています。この寺西さんはずっと大阪府の職員で、退職されて、親族がお持ちのこの長屋を引き継いで、このような活用をされているのですが、現役時代は、景観担当もやられていた方です。残せ、残せと言ってきた手前、自分が長屋を潰すわけにもいかなかったという話もあるのでしょうか。

それともう一つ、この寺西家阿倍野長屋というホームページがあるのですが、寺西さんが建築の専門家でもありますので、これをマンションに建て替えた場合と、この長屋を活用した場合に、地主にとってどちらが得かという試算をされています。その結果、長屋を活用したほうが地主にとっては得だという計算結果が出ています。

先ほど言いましたように、天王寺の南の次の駅ですので、この寺西さんの長屋を潰してマンションに建て替えませんかというディベロッパーさんがたくさん来られました。あるディベロッパーさんに契約の直前までいかれたのですが、思いを変えてこれを残そうということになりました。寺西さんがその計算結果をもとにいつも言うのは、これを建て替え

てもうかるのは誰なのですかということです。建て替えて一番もうかるのはディベロッパー、不動産屋です。地主は借金を抱え、そしてその借金を払っていかねばいけない。それよりもこれを適切な額で改修したほうが儲けとしてはよくなるじゃないかという計算をしています。

この長屋、今は、登録文化財になっていますが、長屋として日本で初めての登録文化財になった物件です。



この物件のお世話をしたのが、後ほどお話をします、丸順不動産という不動産屋さんです。この丸順不動産という地域のローカルな不動産屋さんが、この寺西さんの長屋の改修をお手伝いしたことを契機に、長屋の改修にはまってしまう、今では、どんどん長屋の活用を進めています。

その1つが、この桃ヶ池長屋という、4軒長屋です。ここは雑貨屋さんであったり、カフェバーであったり、ブティックであったりという形で使われているのですが、この4軒の長屋を借りているテナントさんは、全員若い女性の方です。

皆さまに考えていただきたいのはもう一つの話、ここは2階建ての長屋1軒ですが、大阪のど真ん中で、これを借りられると、月々の家賃は幾らぐらいになると思いますか。天王寺の次の駅の好立地の長屋の2階建て1軒借りますと幾らか。実は月7万5千円です。これを高いと見るか安いと見るかですが、この2階は住居として住めます。店と住居と合

わせて月7万5千円で大阪の都心部で店が持て、住めるわけです。そういう、ある意味安価な家賃だからこそ、若い方が何か始めてみようということで、おしゃれでユニークな店を始めています。

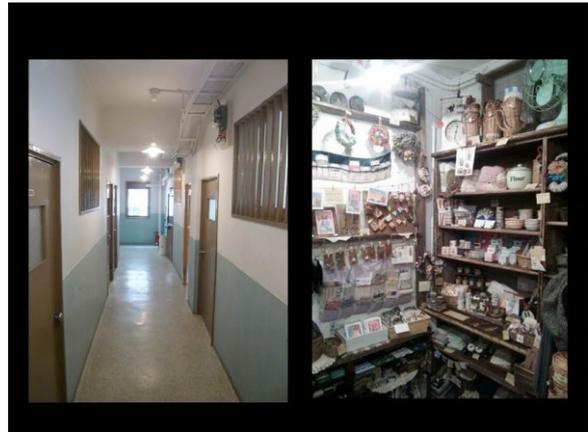
もし先ほどのような建て替えをしますと、家賃が一挙に2倍、3倍にはね上がってしまいます。20万、30万という家賃になります。そうすると、これから始めようという意欲のある方のハードルが高まってしまいます。こういう古い建物だからこそ安く借りることができる。そして、おもしろいチャレンジをしようという店主が集まる、こういう構造がこの阿倍野区の昭和町ではでき上がってきているわけです。

これ以外にもたくさんの長屋の改修、リノベーションが進んでいますが、この前もこの丸順不動産の社長、小山さんと話をしていたところ、借りたい人はたくさんいるのですが、貸したい地主さんが足りないという状況が今起こっています。こういうおしゃれな店が増えてくると、私もやりたい、私もやりたいという方が増えてくるのですが、結局貸してくださる方が増えていません。

昭南ビル



これもちょっと変わった事例です。これは、景観的にはどうかと思う物件ですが、昭南ビルというビルがこの町にあります。これは昭和33年にできた古いオフィスビルですが、エレベーターもありません。その一軒一軒の部屋が狭いこともあって、一時はがらがらの状態でした。



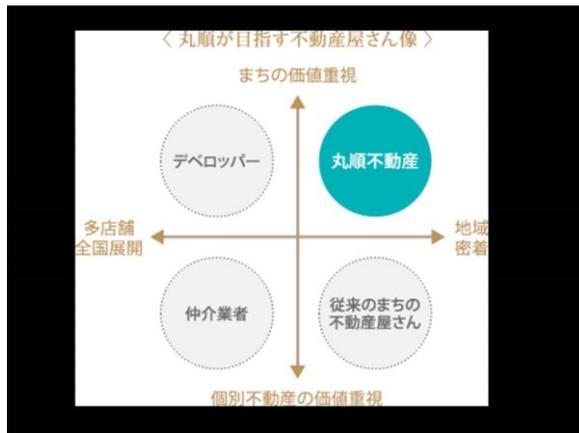
中に入りますと、こんな昔ながらの廊下で、このドアの裏側に一軒一軒のオフィスの部屋がありますが、約15平米ぐらいの小さな部屋です。ここは空き家状態だったのですが、今はこの右側の写真、これは雑貨屋さんですが、こういうお店で、今は満室状態になっています。

丸順不動産

・小山隆輝社長



これらは、この小山社長が頑張ってくださった結果ですが、先ほどの物件を1部屋借りますと、なんと月1万5千円です。先ほどの長屋の7万5千円よりもさらに安い1万5千円でこの部屋が借りられます。そうすると、何か始めたいという人はもっとハードルが下がります。このような新しい事業を始めたい、新しい店を始めたいという意欲のある方々がこういうところに集まってきている。そうすると町全体がおもしろくなっていくという、こういうことを、今、丸順不動産は仕掛けています。



これも丸順不動産のホームページから拝借してきましたが、この横軸は多店舗全国展開、地域密着ということで、どこにこだわって生業をされているのか、仕事をされているのか、グローバルな展開、全国展開なのかローカルにこだわっているのかということです。それから、この縦軸は町の価値重視、個別不動産の価値重視とあって、その一軒一軒の建物にこだわるのか町の価値にこだわるのかというのがこの縦軸です。

そうすると、4つの象限に分かれますが、この全国展開のまちをつくっていく、まちの価値を上げていくのが、いわゆるディベロッパーという方々です。そして、全国展開で一軒一軒の建物をお貸しするのが全国展開のチェーンの仲介業者です。今までの不動産屋さんは、地域密着で一つ一つの建物の賃貸や、売買にこだわってきたわけですが、丸順不動産の小山社長は、実はここがすっかり抜けていることに気がついたのです。

つまり、そのまちの不動産屋さんは、ローカルにこだわっていますが、その一軒一軒の建物を売買したり、建物の賃貸をしたりしては、その不動産屋がまちの価値を高めるという仕事をしないといけないのではないかと、頑張り始めたわけです。

確かに、一軒一軒の長屋を貸しているだけかもしれませんが、でも、その長屋をどんどん増やしていくことによってまちの価値を高めていく。そうすると、この長屋で商売をしたい人は、この昭和町に集まり始める。そして、

こういうユニークな店が集まっていくと、それを求めてお客様も集まってくるというような、その一軒一軒の戦略をまち全体の価値を高めることに結びつけていくという戦略をしています。これが皆さまにもご紹介をさせていただきたい話です。

なぜこの話と今までの話がつながるかという、1つの接点があります。何かというと、地域にこだわるということです。生活に姫路らしさがありますか、地域らしさがありますかという話をしました。この不動産業の展開も地域にこだわってやられているということで、この地域が元気になっていくということで、この丸順不動産をご紹介しました。この地域にこだわる人たちが地域のまちづくりをやることで、その延長上に地域らしい景観ができ上がってきますというのが、本日の私の話のポイントです。

最後に、ちょっと違う話をしたいと思います。

石見市長の挨拶の中に、景観はいろんな好みがあってなかなか難しいという話がありました。確かに好みの問題もあります。でも、景観をずっとやってきた人間から言うと、よく観察をしてみますと、いい景観には共通点があることがわかります。最後に少しデザイン的な側面でもお話をしたいと思います。



これは、金沢にある武家屋敷の壁です。



これは蔵です。これは一見何の共通点もないように思いますが、この塀のデザインと蔵のデザイン、よく見ていきますと、共通項があります。何かお気づきになったでしょうか。

共通項は何かとといいますと、3段構成になっているということです。1段目、2段目、3段目というのがあります。これを専門的には英語でベース、ミドル、トップ、基壇部、中間部、頂頭部と言います。こういう3段構成になっています。この蔵もベース、ミドル、トップ、3段構成になっています。このように、昔のデザインはこういう3段構成が非常に多いです。



ところが、この持ち主さんには申し訳ないのですが、このブロック塀がなぜいけないのかというと、これは3段構成になっていない。非常に単調なデザインになっています。



そこで、市がこの持ち主さんに、この殺風景な壁を何とかしてくれませんか、と、お願いしたことで、このように修景をしていただいた事例です。これは思いつきではありません。先ほど言ったように、1段目、2段目、3段目という3段構成になっています。

本日は、野里の方もいらっしゃいますが、野里もこうやってよく見ていきますと、その共通したデザインのあり方が見えてきます。そういうものをうまく抽出していただいて、新しい建物にも応用することができれば、新しい建物が出てきたとしても、それは古い建物になじんできます。これはよく観察しないと、よく分析しないと見えないことですが、このいいデザインとかいい建物には共通的な仕掛け、秩序があるということも、知って帰っていただければと思います。

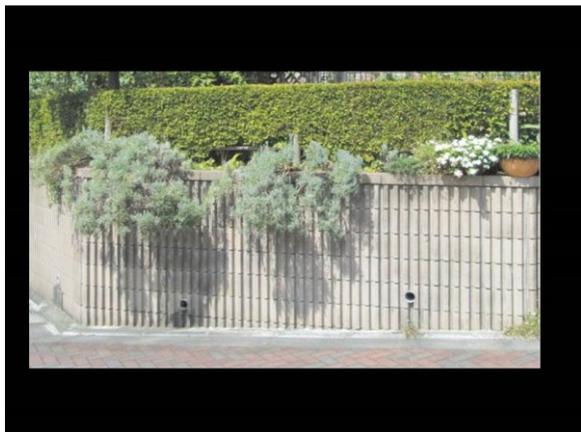


もう一つ、これは石積みの護岸です。石積みの護岸はとても良いです。なぜ良いのか、これは先ほどの話の延長上です。一言で言うと、単調でないということです。これがベタ

のコンクリートの擁壁でしたら単調になってしまいます。ですから、表情をつける。だから、石積みがいいというよりも表情をつけるのがポイントです。



こういうデザインを最近よく見かけるようになりました。コンクリートですが、いわゆる化粧型枠というもので、こういう表情をつけることをやるようになりました。でも、これは私の中では60点だと思っています。なぜかという、これは偽物です。石積みの偽物をつくっているわけです。石積みこんな目地は入りませんし、さらには同じデザインが単調に繰り返していきますから、ベタのコンクリートよりはまだいいですが、これはもっともっと工夫が必要だと思います。



そういう意味では、私は安価で、最近というか、最近といってももう何十年たちますが、いいもの発明されたのかなというのは、この化粧ブロックです。このリブつきの化粧ブロックというものです。これを積み重ねていくと、こういう縦の筋がついてきます。これ

が単調さを防ぐことになっていくわけです。

ですから、石積みが良いという評価ではなくて、単調さを避ける。表情を表面につけていくということが共通です。そういうことを抜き出していくのが景観デザインを良くしていくための1つの手がかりだと思います。皆さまもこれから町を歩いて、これは良いとか、これはちょっと問題だなと思うことをたくさん集めてください。そこから共通した何かが見えてくると思います。

先ほどから野里の話をたくさんしていますが、野里の方々は先祖から受け継いだ建物とか塀とか、いろんなところのデザインに、恐らくいろんな手がかり、共通点があります。野里以外の町でもあります。そういうものをしっかりと見極めていただいて、受け継いでいくことができれば、そのバリエーションがありながら統一感が図れる、そういう景観ができ上がってくると思います。

最後の最後に、写真は用意していませんが、これを手がかりに見ていただいたらわかるのですが、何かというと、よく緑はいいということで、ペンキで緑色を塗ってしまうことがあります。ペンキの緑色と本当の緑は全く違います。何が違うかということ、この緑には表情があるわけですね。先ほど言った表情があるということが重要で、緑色という色が重要ではないのです。そのようなことを考えますと、ペンキの緑はいけないという話にもなってきます。そのように一歩二歩突っ込んで考えてみると、いい景観の仕組み、ルールも見えてくるということ、個別デザインの事例、本日はデザイナーの方もたくさん来られていますので、デザイン向きに最後はおさめさせていただきます。

いい時間になりました。いろいろお話ししました。いろんな観点がありましたので、1つでも2つでもこれからの皆さまの景観づくり、景観まちづくりに役に立ていただければ、話したかいがあります。

それでは、本日はこれで話を終わらせたい

と思います。

(質疑応答)

○質問者 大変すばらしいご講演ありがとうございました。せっかくすばらしいご講演でしたので、質問することで活性化できればいいかなと思ひまして、勇気を出して質問いたします。

先生はいろんなところで取材をなさって、立派な資料を集めてこられていますが、30年にもわたって1つのところに通われたり、いろいろな方に、最初は嫌な顔をされるようなこともあったにもかかわらず、景観のために結果を出すように動いていらっしゃる。そのエネルギーは一体どこから生まれてくるのか、それをお聞きしたいと思ひます。

○久 隆浩 そんなに頑張っているということではないと思ひます。私の本職は教員です。教員と、それから地域の方々と一緒にまちづくりをするのは、ある共通項があると思ひます。それは何かというと、支援、応援することだと思ひます。私が有名になったり、私がよくなっていくのではなく、私がかかわることによって周りの方がよくなっていったり、幸せになっていくところに私は喜びを感じるので、こういう仕事を続けられるのかなと思ひます。

それと、どちらかという、手前みそですが、我慢強いのかなと思ひます。いろんなことを言われても、そのときはぐさっと来ますが、この方も5年、10年たったら私の言っていることもわかってくれるのかなという、そういう長いスパンで物事を考えていくと、短期的な怒りもおさまってくるのかなと思ひまして、そんなことを繰り返しています。

もう一言言うならば、なぜ待つとか我慢することができるかという、やはり相手の方を信頼しているからだと思ひます。この方は今、私と意見が全く違っている、私に対して怒りをぶつけてきますが、やはり5年ぐらいたつてくると理解してもらえないのではないかな

な、心も変わってくれるのではないかなという、そういう相手を信じる気持ちがあるから、長くおつき合ひできるのではないかなと思ひます。私もいろいろ経験して、1年、2年で終わるようなまちづくりはありません。短くて5年、長かったら20年、30年かかります。そういう長いスパンで物事を考えていくと、1日、2日の出来事は乗り越えられるのではないかなと思ひます。